

## 看護大学生の教育場面における高齢者との相互作用

氏名（所属）○松本智美・幸 史子・出口由美・斉藤昌子・井口悦子・野口静子

Keyword： 模擬患者 看護実践能力 相互作用

### 【はじめに】

昨今の若者は、生活の実体験が少なく、打たれ弱く、失敗を恐れる世代であると言われている。看護学生においても同様のことが言える。そのような中、文部科学省は「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」において、看護実践に必要な能力を提示し、看護学教育において実践能力の重要性を示し、これまでの知識偏重教育ではなく、実践能力を高める教育も必要であると述べている。看護実践能力は、学内における講義による知識、それを基に臨地実習における実践を通じた経験及び振り返りにより育まれる。

しかしながら、先にも述べたとおり、生活の実体験の少なさや失敗を恐れるといった若者世代の特徴から、臨地実習において、知識の実践への応用だけでなく、患者や指導看護師とのコミュニケーションも充分取れない場合が多い。特に1・2年次生の基礎看護学実習では、その傾向が強い。

そこで、当学部基礎看護学領域（1・2年次生）では、より効果的な臨地実習が行えるよう、5年前から、実習事前準備として、大村市の2つの老人会のボランティアによる協力を得て、模擬患者による演習を年に2回行っている。また、本年度からは、1年次生を対象に2名の方からの患者体験談を追加した。

今回、私達は模擬患者へのアンケート調査や聞き取り調査及び学生のレスポンスカードから、この取り組みが学生と高齢者の双方にとって、効果的であることがわかったので、報告する。

### 【研究内容】

看護学科1年生を対象とした「コミュニケーション演習」「患者体験談」、2年生を対象とした「看護技術演習：足浴」について、模擬患者として上久原地区老人会、木場長寿会の方20名にご協力を頂いた。

「コミュニケーション演習」では、学生は、講義で学んだ知識やスキルを用いて、初めて学生以外の方とのコミュニケーションに臨んだ。また、模擬患者には、入学して2ヶ月であることを説明し、持病等について学生が

質問した場合、支障のない範囲で応えてほしいと依頼した。

2年生を対象とした「看護技術演習：足浴」では、学生は、初めて学生以外のかたの足浴を行うが、場の設定や方法については、模擬患者から情報を得て実施することとした。一方、模擬患者には股関節の手術後で下肢の屈曲が充分できない状況であるだけ説明し、あとは、自分の持病等を訴えてほしいと依頼した。

アンケート調査は、これらの演習直後に用紙を配布し実施した。内容は、「演習計画についてわかりやすかったか」「模擬患者として演じることができたか」「気づいたことを学生に伝えられたか」「演習後の感想」であった。

また、学生に対しては、全員に各演習直後にレスポンスカードを記載してもらった。

### 【調査結果】

＜模擬患者アンケート結果＞

コミュニケーションにおける模擬患者役割については、「できた」「まあまあできた」と応えた人が83%であった。また、学生へきづきを伝えられたかについては「できた」「まあまあできた」と応えた人が78%であった。演習後の疲労感は無いと応えた人が92%、充実感があると答えた人が88%であった。また、次も参加したいと答えた人は96%であった。

学生のレスポンスカードからは、コミュニケーションでは「声の大きさや話すスピードなど、学生同士では気づかないことを気づくことができた」といった内容や「何を話そうかという思いで一杯で、患者さんの話す内容を聞くことができなかった。自分のコミュニケーション上の改善点がわかった」など、学生同士の演習では得られないことを実感していた。

また、足浴の演習では「自分の計画を実施するのに精一杯で、患者さんの状況や思いまで気持ちが向いていなかった」や「実施前の細かな声かけが大事だとわかった」など、実践に近い状況での演習により、これまで気づけなかった自分自身の傾向などを実感することができていた。

更に模擬患者からの聞き取り調査では「学生から元気をもらった」や「次回はもっと学生に気づきを伝えられるように勉強してきた」「学生は1年でとても成長していた」など前向きな意見をきくことができた。

#### 【考察】

模擬患者の年齢は、60歳代から90歳代と幅広く、全員が、過去5年間ほぼ毎年模擬患者としてのボランティア活動に参加していた。アンケート調査、及び聞き取り調査からは、模擬患者に参加することで、高齢者の「若者を育てる」という役割意識を刺激し、更によりよい役割を演じたいといった内発的動機付けになっていただけでなく、学生の成長を演習という形で確認できることで、自分達の成果を実感することができ、そのことが次の役割への意欲につながるといったスパイラルを起こしていることが明らかとなった。高齢者であっても、社会の中で役割を持つことが、生きがいとなり、元気で過ごす糧になっていると考える。また、学生にとっても、学内の講義からいきなり臨地実習に出るのではなく、模擬患者との演習を間にいれることで、臨地実習における学生のリアリティショックを緩和できるだけでなく、模擬患者から気づきを伝えてもらうことで、ケアの提供の仕方やコミュニケーションのとり方などに学生自身が気づくことができ、実習に向けて改善の努力を行うチャンスとなっていた。

以上のことから、高齢の模擬患者による看護技術演習は、高齢者と看護学生の相互作用により、双方により良い効果をもたらすことがわかった。

今回、アンケート調査に協力頂いた、上久原地区老人会、木場長寿会の皆様に感謝いたします。

#### 【引用・参考文献】

文部科学省HP : 7月19日閲覧

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/)

野村千文：「高齢者の生きがい」の概念分析 日本看護科学会誌 Vol. 25. No. 3 :61-66, 2005

高間由美子他：高齢者の社会参加と生きがいに関する研究 東海女子短期大学紀要, 2002